

卷頭言・母を高齢者施設に入れるの記

西川 伸一

早朝にかかる電話にろくなものはない。たいていだれかが亡くなつたなどの類いだ。なので朝に電話が鳴ると身構えてしまう。あの電話もそうだった。二〇一九年八月一〇日（土）の八時ごろ、新潟・上越市の実家で一人暮らしをしている母親の近所（といつても車で五分くらい）に住む叔父さんから電話があつた。母親が外に出た途端にめまいがして転んで、頭を切つてしまつた。いま病院に来ているという。二針を縫う大けがだつた。付き添いなどですっかり叔父さんには迷惑をかけた。

母親は一九三四年生まれなので今年で八六歳になる。一九九六年一二月に父親が死去してからずっとといわゆる独居老人である。この二〇年以上の間、けがや病気で私がかけつけたことはない。年末年始とゴールデンウィークに帰省するくらいだつた。子どもたちが小さかつたころ手伝いに来てもらうなどその逆は多くあつたのだが。私はただ甘えていればよかつた。

ところが、二〇一八年の元日の朝、認知症がはじまつたようだ、物忘れがひどいと母親から打ち明けられた。とはいへ、面倒なことは先送りしてしまう。このときも様子を

みて手を打てばいいくらいに考えていた。その後、妻の助言に従つて、ホームヘルパーの方に週に一度来てもらうことにした。安否確認だけでもありがたい。しかし、この年に認知症は確実に進行していたことをあとで知ることになる。

二〇一九年の元日の夕食後、母親から話があるという。嫌な予感がすると案の定だつた。ホームヘルパーに財布を盗られたからもう訪問はやめてほしいと頼まれた。物忘れに加えて物盗られは認知症に典型的な症状である。もちろん財布はあとで出てきた。ただ本人の記憶には物盗られの記憶だけが強く残つていて、修正が効かない。物忘れも深刻になり、何度も同じことを尋ねてくる。体重は三〇キロ台そこそこに落ちた。自分一人のために日に三度の食事をつくるのがおつくうになり、きちんとした栄養が取れていないので。

ホームヘルパーは別の方に代わつてもらい、デイサービスにも通わせるようにした。要介護度は「1」と認定された。ゆくゆくは施設に入所させなければと漠然とは思つた。けれども、まだ少し先のことだろうと無理矢理楽観視して気持ちの整理をつけた。そして冒頭で記した「事件」が起きる。たまたまその夏には八月下旬に帰省の予定を入れていた。この機会に、叔父さんも交えて母親本人と今後の行く末を話し合つた。というより、施設に入るよう半ば説得した。母親は不承不承折ってくれた。

東京に戻つて、私と妻、さらに弟夫婦の四人で施設探しをはじめた。介護付有料老人

ホームをいくつかみて回った。驚いたのは、こうした施設に入ると物盗られのトラブル防止のため現金は持たせてもらえず、入浴は介護保険の関係から週二回であること。徘徊を防ぐ必要上、エレベーターは職員しか知らない暗証番号を押さないと動かないこと。個室ではあるが、緊急時対応のため部屋の鍵はない。トイレがカーテンで仕切られているだけの施設もあった。今のところ何でも一人でできる母親を入れるのはかわいそうだ、という印象を強く抱いた。

結局、入所候補施設として決めたのは、相模原にある住宅型有料老人ホームである。高齢者向けのホテルをイメージすればよい。部屋に鍵がかかり、食事は三食ともレストランで出される。大浴場もある。実はそこには、私の中学時代からの親友のお母さんがもう八年も入られていた。その彼からあの施設はいいと言わされて見学したのだった。やはり友だちは大切にしておくものだ。自宅からも弟宅からも一時間で行ける。

次は母親の同意を得なければならない。九月下旬に妻と帰省した。母親は最初のうちは言を左右させていたが、一月に一週間の体験入居をすることには承知してくれた。こうして迎えた体験入居の四日目に母親の部屋を訪ね、実家を引き払ってここに住まないかと恐る恐る打診した。母親は意外なほどあつさりこれを受け入れた。親友のお母さんの配慮もあり、また「上げ膳据え膳」が気に入ったのかと喜んだ。だがその喜びもつかぬ間だった。

翌日再訪するとラジオを盗まれたという。前日小型ラジオを買って持つて行つたのだった。施設側のだれかが合鍵を使って、自分の不在中に部屋に侵入して盗つていつたと言ひ張る。反論しても無意味なので、部屋中を探すが出てこない。ケチらずにもつと大きなものにしておけばよかつたと後悔した。次にはお気に入りのカーディガンも盗まれたと言う。幸いこれは体験入居中に見つかって安堵した。

本入居となると、いつたん実家に帰つて引っ越し準備やそれに関わる諸手続きをしなければならない。あまり長く実家にとどまるに、やはり相模原には行きたくないと言い出しかねない。相当強引だつたが、四泊五日でそれらを済ませた。最初の一泊は妻に行つてもらい。あとの一泊を妻と一人でさばいた。

一月一四日（木）の一〇時ごろ、親戚や近所の方々に見送られて、前出の叔父さんの車で北陸新幹線の上越妙高駅に向かう。母親がこの地に戻ることはもうないだろう。母親は眠れなかつたという。一方私はその頃難しい校務に四苦八苦の状態で、母親に気を遣う余裕はなかつた。新幹線の車内でもメールの処理に追われていた。ただ、上越妙高を発車してすぐに母親が「虹だ」という。確かに後方に大きな虹がかかっていた。やはり神はいるのだろうか。

一〇一九年から二〇二〇年の年末年始は拙宅に母親をよんでも、大晦日には弟夫婦にも来てもらい、子どもたちを合わせて七人のにぎやかな年越しになつた。明けて元日には

府中の映画館に『男はつらいよ お帰り寅さん』を母親と一人で観に出かけた。今まで
はかなり施設になじんだようである。「盗られた」発言もない。施設で三食とも栄養バラ
ンスの行き届いた食事を取っているのも大きいと思われる。
さて、二〇二一年の元日はどう迎えていようか。

二〇二〇年二月一二日